

## サーロー節子さんの思い出

武田 建

私の母は熱心なクリスチャンでした。私が大学生の頃、母が通う甲子園教会では、関西学院大学宗教主事(宗教センターと経済学部を担当)をしておられた山崎治夫先生が牧師でした。父も、母のお供でその礼拝に顔を出していたのです。

その頃、この教会に北米の大学を出たばかりの若者が、宣教師見習いのような形で来ていました。カナダから来たジム・サーローという背の高い、もの静かな青年もその一人でした。日本に3年間滞在するので「J3」と呼ばれていました。アメリカンフットボールを随分助けて下さったポーター先生の後任のような形で、関西学院中学部で英語を教えていました。

彼は3年間(1952年9月～55年5月)の日本滞在中に、内外協力会主催の国際ワークキャンプに参加しました。そこで広島女学院大学から参加した中村節子さんと出会い、彼女が卒業後アメリカの大学へ留学したのを機に結婚しました。1955年のことです。その秋、二人はトロント大学の大学院に入学、ジムは歴史学を、節子さんは社会福祉学のグループワーク、つまり小集団の指導の理論と方法を専攻なされたのです。

私は、1956年秋にトロント大学大学院へ留学(留学までの経緯は2～4頁をご覧ください)、その年の冬休み、ジム夫妻に連れられ、ジムのご両親のお宅でクリスマス休暇を過ごしました。トロント大学はセメスター制で、9月に始まる秋学期の期末試験を冬休みが終わった1月初めに行っていました。英語もできず、授業にも十分ついてゆけない私に、節子さんは前年にご自分が受けた試験問題を見せて下さいました。それが私をどれほど助けたか計り知れません。そのお陰で、カナダ人学生に負けない成績を確保することが出来たのです！その年の夏前、お二人揃って修士の学位を取得なさいました。そのガウンとキャップ姿を見て、「うらやましいな。自分も来年マスターの学位が取れるといいのに」と思ったものです。

その秋、お二人はカナダ合同教会宣教師として、関西学院に赴任なさいました。そして、キャンパス内の外国人住宅二番館にお住まいになりました。ジムは文学部の史学科で教鞭をとりました。節子さんは男の赤ちゃん(ピーターとアンドリュー)を出産、子育てに忙しくなさいましたが、その合間を縫って、社会学部に移った社会福祉専攻の授業をお助けくださったのです。

1962年、お二人はトロントにお帰りになり、ジムは高校の歴史の先生に、節子さんはトロントYWCAのソーシャルワーカーとして働き始められました。そして、節子さんの反核平和運動が本格的に始まったのです。カナダだけでなく、アメリカのどんな小さな田舎町でも、要請があれば飛んでゆき、子どもにも、若者にも、大人にも、老人にも、男女のへだてなく、一所懸命に核兵器廃絶の大切さを訴えてこられました。

夫のジムは2011年にトロントで亡くなられました。ご存命中は、日本に来られると出来るだけ関西学院にも足をこぼれ、時には関学のゲストハウスに一家でお泊りになって、昔の友達を訪ねたり、お食事をともにしたり、旧交を温める機会を持たれました。我々夫婦も必ず拙宅か何処かのレストランでお食事をしていました。しかし、そういった席では反核運動のリーダーというより、昔からの友人として世間話や子どもの話をする、普通の「おばさん(おばあさん)」や「おじさん(おじいさん)」であり、久しぶりの日本食を楽しむ姿があるのです。それと同時に、核問題のことに触れた時の節子さんの厳しいお言葉を聴き、お顔を拝見すると、世界の核兵器廃絶のリーダーであることを改めて知らされ、心からの敬意を示さずにはおられません。【関西学院大学名誉教授、元理事長、元学長】



写真撮影・提供: 山崎住夫さん



写真冒頭: ジムさんの記念式終了後、ご自宅に戻られた節子さんとご次男アンドリューさん。2011年。

写真左: 関西学院の宣教師とその家族。1959年、または1960年。椅子席女性、右から2人目が節子さん。前列中央の少年(チェック柄)はマッケンジー・クラグストン前駐日カナダ大使。

『学院史編集室便り』第47号(2018年5月1日)

関西学院大学 学院史編集室 〒662-8501 西宮市上ヶ原 1-1-155

TEL: 0798-54-6022 FAX: 0798-54-6462

<http://museum.kwansei.ac.jp/archives/>